



Profile—相川 充

1983年、広島大学大学院教育学研究科博士課程後期単位取得退学。博士(心理学)。宮崎大学助手、講師、助教授、東京学芸大学助教授、教授を経て現職。専門は対人社会心理学。著書は『人間関係を支える心理学』(共編著、北大路書房)、『イラスト版子どものソーシャルスキル』(共著、合同出版)など。

英国バーミンガムでの短い生活は、私のその後の長い研究生活に決定的な影響を与えました。1989年11月から1990年9月まで文部省在外研究員としてバーミンガム大学でhonorary research fellowになった日々です。

奇縁から私は、著名な社会心理学者であったオックスフォード大学のM.アーガイル先生の知己を得ていたので、彼のもとでソーシャルスキルについて学ぶつもりでした。ところが、「ソーシャルスキルについては日本でも本で学べるが、ソーシャルスキル・トレーニング(SST)については日本では学べない」と彼に余分な一言を伝えたところ「それなら私よりもっと良い先生がいる」と紹介してくれたのがC.R.ホリン先生でした。余分な一言のせいで私は「伝統あるオックスフォード大学に行くぞ」と意気込んでいたのに、1900年創立の新しい(と当地人たちが言う)Red brick universityの代表格、バーミンガム大学に行くことになりました。

ソーシャルスキル・トレーニングのトレーニングを受けた日々

筑波大学人間系 教授

相川 充 (あいかわ あつし)

さらに、この余分な一言のせいで、私はバーミンガム大学内に与えられた研究室に居るよりも、ホリン先生が兼任していた国立の矯正施設(行動療法観の観点で運営)に、見習いトレーナーの形で通うことが多い日々になりました。この施設は、重罪の非行少年だけを収容しているところで、私は毎回、ネクタイを外し、車のキーを受付に預けてから、監視カメラに見守られながら重い鉄の扉を開けて施設内に入りました。こう書くと、少年院のような施設を思い浮かべるでしょうが、施設内は、ユースホステルのような明るい雰囲気、少年少女たちは各自、個室を持ち、個室以外は男女同じ共用のスペースで生活していました。

私は少年2名、少女1名の担当になり、そのうちの18才の少年(放火と強盗で入所)に対するSSTに参加しました。彼は社会性全般が欠如していて、特に対人場面で特異な行動(例えばタッチングの多さ)がありました。その特異な行動の生起頻度を下げることが私の最初の課題でしたが、彼の英語は、Cockney英語(It's fine today.がIt's fine to die.に聞こえる英語)で、しかも非行少年独特の話し方をするため、私にはなかなか聞き取れず苦勞しました。施設内のスタッフに助けられながら、ホリン先生から、SST対象者の行動的なデータを豊富に集めて(例えばAntecedent-Behavior-Consequences分析など)行動的な査定をするやり方や、行動変容の諸技法(例えばシェイピング法

など)、認知を変容させることの重要性とそのための技法について徹底的に教え込まれました。お陰でSSTの実践法を体験的に学ぶことができました。

私は英国人の暮らしを実体験したいと思っていたので、「犬が嫌いだから行くのはイヤだ」と言う妻を説き伏せて、妻と、2歳と5歳の娘も連れて行きました。家主に「白人にしか貸したくなかったのに」と言われながら白人街にsemidetached houseを借り、前庭でバラを育て、裏庭に洗濯物を干し、中古車を買って家の前の路上に駐車し、5歳の娘を教会の保育園に入れて送り迎えをし、夕方にはコミュニティセンターで、背の曲がった痩せた白人老人に「私は日本人が嫌いだ。捕虜の扱いがひどかった」などと言われながらcalligraphyを習いました。週末には妻子を車に乗せてroundaboutの交差点で方向感覚を奪われながら、英国的風景の広がる郊外へのドライブを楽しみました。クリスマスには家族で英国国教会に行き、厳肅な気持ちになりました。

妻の社交術のお陰で、ホリン先生とは家族ぐるみで(彼の愛犬、真っ黒なラブラドル・レトリバーも一緒)、家を訪問したり、されたりしました。家主夫妻とも家族ぐるみで親しくなりました。

この在英体験によって私は自分の学術的な“遅れ”を知り、目ざすべき研究者像を変えました。「国際的に活躍する研究者」から「国内で活躍する研究者」へと。